

# 『法律学の始発駅』

---

(T.H・学部生・20代)

長谷部恭男先生による、法律学入門書の新たな傑作です。法学入門は、著者の個性が特に色濃く出る書籍だと思いますが、本書もまた法と道德の違いなど法律学の出発点とも言うべき題目群につき、ご自身の視点から紐解かれています（『創世記』が引用される法学入門書は他にあるのでしょうか…）。

章立ては比較的細かく、それぞれ設定されたテーマにつき、前提から丁寧に説明がなされています。特に私は「解釈」の章を詳しく読みました。法律について専門に学んでいる学生は、論点と呼ばれる法解釈論に目が向きがちではありますが、本当に法律は元来「解釈」しなければ理解不能なものなのでしょうか。そもそも法文の「解釈」に関して法律学の学説はいかなる役割を果たしているのでしょうか。

このような言わば「法律学の総論」となる議論について、法学を学ぶ者は必ず接して、理解しなければならないと強く感じました。本書においては「調整問題」や「権威」、「ベースライン」について書かれた箇所にあたります。“法律学”の旅の途中の人も、この始発駅には意識的に立ち寄るべきです。それにしても、「飛驒の山奥に大きな穴を掘って…」のくだりは、さすがに笑ってしまいました。